

一金四萬圓也
 一金三萬圓也
 一金五萬圓也
 一金貳拾九萬六千四百四拾參圓四拾九錢也

役員賞與金
 退職手当準備金
 研究資金積立金
 後期繰越金

取締役社長	井坂孝
專務取締役	吉田一郎
取締役	原邦造
"	各務鎌吉
"	中川末吉
"	松本幹一郎
"	牧田環
"	寒川恒貞
"	三谷一二郎
監査役	中村房次郎

" " 後宮信太郎
 " " 安達房治郎

大株主

三菱工業	二七、〇〇〇株
三井鑛山	一五、〇〇〇
臺灣電力	一五、〇〇〇
古河電工	一〇、〇〇〇
三井合名	一〇、〇〇〇
三菱社	五、〇〇〇
住友本社	三、〇〇〇
安田保善社	三、〇〇〇

事業規模

工場所在地 臺灣高雄市
 生産高

年額六千噸(第一期計畫)

我國アルミニウム生産會社

アルミニウム

一九〇

石 鑛 石

蘭領印度、リオ群島、ピントアン島ボーキサイト

製 造 法

バイヤー法（濕式法）

日 産 能 力

×〇〇噸

電解工場電氣爐

一五四臺

業 績

	利益率	配當率
十一年上	割	無配
十二年上	〇・〇五	〃
十二年下	〇・三二	〃
十三年上	〇・九三	〇・六
十三年下	一・四四	〇・七

住友アルミニウム製錬株式會社

資本金 一千萬圓
 拂込 二百五十萬圓

設立 昭和六年四月

當社は、最初、伊豆半島宇久須の明礬石について、住友化學工業で試験し、朝鮮玉提山の自社の明礬鑛區の原鑛と共に、之れを工業する事になつたが、宇久須原鑛の方は、うまく行かず、昭和十二年末に至り、當社では、専ら、朝鮮産の明礬石を使用して、年産×千×百噸を運轉したが、その成果が、甚だ不良であつて、増産を行ふについても非常な支障を生じた。

かくて、航空機、自動車其の他の軍需品の需要に對應するに足る如き優秀品は、到底、明礬石を原料としては、多量に生産出来ないと言ふ結論に到達した。依つて、いよく當社では、ボーキサイト使用に依るアルミニウム年産××噸生産能力へ邁進する事となつた。

三井鑛山及び南洋拓殖の提携に成る南洋アルミのパラオ島ボーキサイト年間二萬噸の供給を受けることに契約成り、同社新居濱工場を擴張して、年産××噸生産に乗出す計劃を立てるに至つた。

昭和十三年に入つて、時局の進展と共に、アルミニウムの需要は、益々、増大し、これがため、當社の××噸計劃も着々進み、目下商工省へ認可申請中であるが、これが許可の上は、當社の現在を×千×百噸ペラントも、一躍六倍以上の擴張となり、我國アルミニウム工業界に、

我國アルミニウム生産會社

一九一

偉大な地位を占めるに至るのも、遠くないであらう。
経営陣左の如し。

社長	小倉正恒
常務	山本 渙
取締役	浅田平藏
	山本信夫
監査役	矢部忠治
	矢崎 摠治
	松本 順吉
	有田 邦敬
	浅田 麟藏
	國府 精一

日本曹達株式會社

資本金 八千萬圓

拂込資本金 五千四百四十三萬圓

設立 大正九年二月
方法 バイヤー法

大正九年、曹達工業を中心として、其他一般化學工業藥品の製造販賣を目的として、資本金七十五萬圓を以て創立されたのであるが、今では、日曹コンツェルンとして、その營業内容は、頗る多岐多端、一々之れを擧げないが、大體次の如くである。

曹達、晒粉、硫酸、電氣亞鉛、硫酸亞鉛、特殊鋼、其他化學工業藥品、染料、アルミニウム、ニッケル等。

當社が、アルミニウム工業に進出したのは、比較的新しい。昭和十一年の春からアルミニウム製造工事に着手したものである。

勿論、それ迄に、二本木工場で、實驗が繰返されて居た。そして、各國に最も廣く採用されて居るところのバイヤー法に據る事と最初から、決定されて居たものである。たゞ原料問題で悩みがあつた。大體バイヤー法は、ボーキサイトに適當する製法である。

日本電工の明礬石、日滿アルミニウムの礬土頁岩を以て、夫々獨特の製造を行つて居るのに對して、當社は始めから、最も危険の少い、バイヤー法を採用する事を決定したのであるが、原料

の問題も、伊豆半島、岡山、信州、青森、山口から、朝鮮満洲にかけて、到るところに得られる事が明らかとなつた。南洋印度は一層豊富である。

そこで、日本曹達では、高岡工場を之れが製造工場に充て、酸とアルカリとアルミニウムを以て、高岡工場の運轉を行ふ事になつたのである。

アルミニウム製錬に必要な、水力電気は、日本電力から、一萬二千瓩を、一瓩八厘で契約する事が出来た。バイヤー法に則るとは言ふものゝ、細部の研究は、全部これを同社で行ひ、水晶石も自給する。斯うした状態で、當社は、他よりも、幾分出發を遅れてアルミニウム業に乗出したのである。

かくして、昭和十一年の末から、アルミニウムの製出を行ひ、十一年に入つて、更に優良な製品を製出する事に成功し、つゞいて、本格的生産に當り、その前途は、頗る注目されるほど、成績は順調に進んだのである。

十二年も、下期に入るに従ひ、第一期×千×百瓩能力を、更に進めて、×千瓩能力へ擴張する必要に迫られた。言ふ迄も無く、時局の進展が、アルミニウムの需要を、非常に増大しつゝあつたからである。

製品も、九九%と言ふ優良品が生産されるに至つた。然し、操業まだ日の浅いことゝて、×千×百瓩生産は、全連轉と言ふ譯には行かなかつたが、引續き、生産能力は擴張されつゝあつた。

昭和十二年の末頃から、開始されたアルミニウム増産計畫は、着々進捗し、第二期×千瓩計畫も、ほとんど完成を見るに至り、品質の優良によつて、常に販賣上、好條件の下に置かれて居ると言ふ。

アルミニウムの本格的収益化も、當社は、これからだと言ふ可きであらう。参考までに、當社の最近の内容を示すと左の如くである。當社は、最近、興銀から重役が這入つて、内容も従來の急膨脹政策から、堅實經營へと歩みつゝあり、曾ての水膨れ會社との悪評も、漸次訂正されつゝある如くである。

貸借對照表

借方(資産)	
未拂込資本金	二五、七四五、四七五
興業費	三九、〇七六、七九三
我國アルミニウム生産會社	一九五

有價證券	二四、三九二、二二一
賣掛金	四、九〇四、四二八
受取手形	二、七八三、三九三
銀行預金	三、二〇六、〇八二
振替貯金	一、七一九
特別預金	六九、四五三
郵便貯金	三三、六九三
金銀	二七、二七四
製品及半製品	五、九六九、九七八
貯藏物品	一二、七九一、一二八
工作勘定	七四、七一六
保證金	七二、四七九
假拂金	一、〇一九、三七七
未收入金	一九一、二九四
傍系會社勘定	二、〇二三、七三六
合計	一一二、三八三、二四五

貸方(負債)

資本金	八〇、〇〇〇、〇〇〇
法定積立金	二、二五九、九五〇
別途積立金	九五二、四〇〇
使用人退職手當及養老手當基金	四〇四、三九九
社員積立金	七六、三八五
職工退職手當準備金	一一二、二六五
職工積立金	三六、九一九
社債勘定	三、八〇〇、〇〇〇
支拂手形	二六、〇九〇、八五九
未拂金	三五三、六七二
掛買金	二、八五〇、六三四
假受金	二一九、五〇一
前期繰越金	三五四、六〇三
當期利益金	四、八七一、六五五
合計	一一二、三八三、二四五

損益計算書

当期純益金	三、一七二、八六六、六六二
当期總損金	一七、四一五、〇〇七
差引	四、八七一、六五五
内諸銷却金	一、七〇〇、〇〇〇
再差引	(累計金七、九四七、〇〇〇)
	三、一七一、六五五

利益金處分

当期純益金	三、一七一、六五五
前期繰越金	三五四、六〇三
合計	三、五二六、二五八
内法定積立金	二四五、〇〇〇
別途積立金	一二〇、〇〇〇
使用人退職手當及養老手當基金	六〇、〇〇〇
役員賞與金及交際費	一二〇、〇〇〇
株主配當金	二、六二五、七〇〇

(年一割二分 舊株 一株ニ付金三圓
新株 一株ニ付金八十七錢五厘)

後期繰越金

三五五、五五八

同社の經營陣左の如し。

取締役社長	中野友禮
専務取締役	野澤正閣
常務取締役	小長谷新太郎
”	末廣幸次郎
取締役	神尾友修
”	辰澤茂乙
”	竹中治
”	岸本吉左衛門
”	木村忠實
”	齋藤虎五郎
”	入江芳之助

アルミニウム

監査役 高橋 眞男

武鶴 次郎

遠山 元一

金井 滋直

相談役 増田 義一

鈴木 寅彦

大株主

日本鑛山 一一〇、六三〇株

日曹鑛業 八〇、〇〇〇

九州曹達 六二、六〇〇

中野有禮 五二、五九八

日曹人絹 五〇、二〇〇

東株代行 四一、九九〇

工場 埼玉縣戸田村、新潟縣二本木、福島縣會津、江名、富山縣富山、高岡、東岩瀬、東京王子區、横濱市

生産能力

晒粉 月産能力 x、x x 〇 池

苛性曹達 月産能力 一、九一五

業績 アルミニウム年産能力 二、五〇〇

十一年上	二・六八	利益率	一・二〇
十二年上	二・四一	配當率	一・二〇
十二年下	二・七五		一・二〇
十二年下	二・二七		一・二〇

日東化學株式會社

資本金 二千萬圓

我國アルミニウム生産會社

拂込資本金 五百萬圓

方法 燐酸礬土法（東京工大加藤博士の發見にかゝる）

設立 昭和十二年八月

昭和十二年八月二十三日、大日本製糖の子會社として誕生、創立當時の重役左の如し。

取締役社長 藤山愛一郎

常務取締役 庵地佑吉

取締役 金澤冬三郎

秋山孝之輔

赤司初太郎

山下太郎

渡邊甚吉

藤山九一

名取和作

中村房治郎

西原雄次郎

大日本製糖の所有する南大東島と北大東島の中、北大東島に、豊富な燐酸礬土鑛があるが、かねて、これは上層の燐鑛石は、肥料と燐寸の原料として、小規模に採取されて居たものであつたが、これの含むアルミナの利用について研究が進められ、東京工業大學教授加藤博士によつて、これが分離が成功した。その後加藤博士の下で、約一年間研究が續けられ、いよく工業化の自信もついたので、會社を設立して、大々的アルミニウム生産を行ふ事となつたのである。

當社に依れば、原鑛は、一年に一萬五千噸を採掘し、別に接觸式硫酸日産百噸生産の設備をも併せ行ふ。岩手縣の松尾鑛山から硫化鑛を買入れて、コークスを原料として水素を回收し、合成硫酸日産四千噸の製造をも行ふと言ふ。

アルミナ 年産 五、一〇〇噸

硫安 二五、八〇〇

化成肥料 二〇、〇〇〇

右の如き豫定であると言ふ。工場は、青森縣八戸市外七萬坪に建設する。

我國アルミニウム生産會社

今、同社の起業豫算書を見ると左の如し。

起業豫算書

一、建設費

内 第一回拂込金(一株十二圓五十錢)

借入金又ハ第二回拂込

建設費の内容

創立費	一一、〇〇〇、〇〇〇圓
土地買入費	五、〇〇〇、〇〇〇
アルミナ工場	六、〇〇〇、〇〇〇
硫酸工場建設費	三〇、〇〇〇圓
アンモニア工場	二〇〇、〇〇〇
附屬建物諸設備	二、七一三、〇〇〇
總係費	一、三〇〇、〇〇〇
利息	五、〇〇〇、〇〇〇
特許料及豫備費	五二五、〇〇〇
	二七五、〇〇〇
	二七〇、〇〇〇
	三七〇、〇〇〇

以外に運轉資金

以上

收支豫想は左の如くである。

總收入	一〇、六八三、〇〇〇
内製品收入	五、九五二、〇〇〇圓
雜收入	五、九三九、〇〇〇
總支出	一三、〇〇〇
内原料費	四、一四八、〇〇〇
製造費	一、五九六、〇〇〇
荷造費	一、一二一、〇〇〇
製品諸掛り	二八三、〇〇〇
利息	二八六、〇〇〇
諸税	二二五、〇〇〇
營業費	三二〇、〇〇〇
差引利益金	三一七、〇〇〇
内償却金	一、八〇四、〇〇〇
	八〇〇、〇〇〇

再差引

純益金

一、〇〇四、〇〇〇

右の収入は、アルミナを一吨三百圓、硫酸を八十圓、化成肥料百二十圓賣として見積つたものだと云ふ。

然らば、磷酸礬土鑛とはどんなものか。今、その成分を見るに、左の如し。

アルミナ	磷酸
四〇%	三〇%

之れを、他のアルミナ原鑛に比較するに左の如し。

アルミナ含有量%

ボーキサイト	五五
礬土頁岩	四五
明礬石	二五(この他に加里五%)
粘土	三〇

磷酸礬土鑛は、ボーキサイト及び礬土頁岩に劣り、明礬石、粘土に優る。然し乍ら、こゝに

磷酸礬土鑛の特色は、磷酸と言ふ副産物の採れることだ。當社の製法には、この磷酸の分離に、獨特の手法がある譯である。

アルミナの製造工程は、然らば如何と言ふに、次の如し。

磷酸礬土鑛—焙燒粉—固相反應—泥明礬—明礬—反應—水酸アルミニウム—アルミナ

創立總會を八月二十三日に終つた當社では、直ちに八戸工場の建設を急ぎ、磷酸礬土鑛一萬五千吨を以て、アルミナ年五千五百吨の生産、及び硫酸其の他の生産を行ふとする意圖の下に第一期工事として、先づ硫酸工場(モンサント法、日産百吨)、アンモニア工場(ハーバーボツシユ法、日産四十吨)、アルミナ工場、硫酸工場を建設する。

昭和十三年に入り、建設工事は着々と進捗、當社ではこの建設資金問題に關して、三井、三菱、三和、第一の四銀行を以てシンヂケートを組織し、六百萬圓の融資を受ける事となつた。借入條件は、(一)金額六百萬圓、(二)期限、一ケ年、(三)利率日歩一錢二厘、(四)返済方法、大日本製糖の保證の下に、工場操業後、逐次返済。

所要資金の残部三百萬圓については、この秋頃、第二回拂込、一株七圓五十錢程度を徴收し

て、これに充てる筈となつて居る。

かくて、七月中旬、先づ接觸硫酸日産百吨工場に、火入れを行ひ、本稿執筆頃には、もはや操業開始の段取りとなり、年末迄に、硫安、化成肥料、アルミナ工場も完成の豫定で、遅くとも、明春には、運轉を見る筈となつて居る。

創立以來、僅か一ケ年足らずであるが、當社の建設工事は着々と進行し、殊に、資本的背景にも恵まれ、經營者陣にも、よくその人を得て居るので、前途は、非常に注目されて居る。

藤山社長は、アルミナから、一貫してアルミニウム製錬法を行ふことに方針を決め、祕かに倍額増資の案も考究されて居ると言ふ。

業績

利益率

配當率

十二年下

〇・一〇
(三ヶ月決算)

無配

我國アルミ關係業者の一覽表を左に掲げて置かう。

本邦アルミニウム業者一覽

アルミナ及アルミニウム製造工場

日本電工、日本アルミ、日滿アルミ、住友アルミ、住友化學工業、飾磨化學工業、日本曹達、日本窒素、日東化學工業、滿洲輕金屬、東北振興アルミ。

地金、鋸、材料販賣業者

亞細亞アルミナム、アルミニウム、ユニオン日本支店、三菱商事、三井物産、岩井商店、安宅商會、阪根金屬商工、淺野物産、エカメロン商會、洋白會社、原田商事、高橋愛治、吉田定七、南部、内田(畿)平井アルミニウム、伴野、伊藤裕造、龜田多良、日本アルミ製造所東京支店、大阪アルミ製作所東京支店。

アルミニウム板壓延工場

住友アルミニウム、日本アルミ製造所、大阪アルミニウム、池田アルミ、高田アルミ、古河電氣工業、鷹取アルミ、平和金屬、矢倉アルミ、松尾アルミ、那須アルミ、南京アルミ、山中アルミ、大畑伴銅、南木アルミ、吾孺アルミ、東亞工業、日本壓延工業。

アルミニウム輕合金工場

住友金屬工業、日本アルミ製造所、大阪アルミ、池田アルミ、牧野輕合金、鑄物機械製造、

大阪輕合金、平尾アルミ、日の丸アルミ、古河電氣工業、東京瓦斯電工、中島飛行機、日立製作、日本火工、石川島造船、池貝鑄造、東京輕合金、秋田工場、金門商會、東京アルミ工業、新潟鐵工、中央工業、正田飛行機、旭輕合金、神戸製鋼、三菱重工、持株輕合金、
アルミニウム鋁製品工場

(大阪) 日本アルミ製造所、大阪アルミ、池田アルミ、高田アルミ、板東アルミ、三好アルミ、田中アルミ、大京アルミ、大紀アルミ、小田アルミ、川本金屬、星鷹アルミ、矢倉アルミ、松尾アルミ、伊藤アルミ、松下アルミ、山森アルミ、岩田アルミ、玉田アルミ、中央アルミ、片岡アルミ、明石アルミ、三共アルミ、平井アルミ、粟田アルミ、大浦アルミ、三谷アルミ、梅田アルミ、千葉アルミ、錢屋アルミ、酒木アルミ、我アルミ、丸中アルミ、石田アルミ、梅原アルミ、前川アルミ、東洋アルミ、瑛瑯、春藤アルミ、小鴨工場アルミ部、日進舎アルミ、岡アルミ、宮前金屬、大一アルミ、渡邊アルミ、藁茸アルミ、小林アルミ、伊賀善、中島アルミ、原アルミ、松岡アルミ、寺脇アルミ、小川アルミ、丸矢アルミ、中谷アルミ、木村アルミ、武内アルミ、池田アルミ、城南アルミ。

(東京) 邦須アルミ、東京アルミ、山中アルミ、橋本アルミ、大東アルミ、島田アルミ、原田アルミ、飯塚源七、東寶アルミ、大橋、深海、瀬古、久保寺、今村、安達、岡本、折田、篠原、棚橋、成田、中野、松田、江口。

(地方) 名古屋アルミ、池田アルミ京城支店。
アルミニウム鑄造製品工場

(大阪) 横山アルミ、浪速アルミ、大紀アルミ、古河電工大阪工場、矢倉アルミ、屋敷アルミ、丸一アルミ、萬年アルミ、帝國輕銀、朝日アルミ、野村アルミ、右近アルミ、中原アルミ、西村アルミ、兼松アルミ、山崎アルミ、丸菱アルミ、橋本アルミ、石川アルミ、淺香アルミ、川瀬兄弟アルミ、日の出アルミ、大同鑄造、昭榮アルミ、加納アルミ、細居小治郎。

(東京) 大熊アルミ、中條輕銀、東京アルミ鑄工所、日ノ出アルミ、西垣、小林、佐藤、大澤、草島アルミ、庄司、河野、森、角田、安濟、尾形、清水、日本硬質ニウム、橋本、岩田、河野。

(地方) 服部、中尾鑄造、山崎鑄造、大塚鑄造、竹本鑄造、尾崎鑄造、高田アルミ工業(廣島)、廣島輕銀、中村アルミ、三條輕銀、市場輕銀、高田鑄造、廣吉輕銀、中島アルミ、北陸アルミ、大寺、磯野。

アルミニウム

アルミニウムペイント工場

日本ペイント

關西ペイント

酸化被膜加工場

理研アルマイト工業、日本スパルマイト、日本アルミ製造所、那須アルミ、大阪銀アルミ、三好アルミ工業、エナニウム工業、大澤商會大阪支店（以下屑金再製工場及器物問屋名一省略）

アルミニウム（終）

昭和十三年九月十五日 第一刷印刷
昭和十三年九月二十日 第一刷發行

新興産業の基礎知識(2)

アルミニウム

〔定價〕 金八拾五錢

版權所有

啓者印



啓秋社

著者

景氣研究所
代表 勝田貞次

發行者

東京市日本橋區吳服橋二ノ五
神田龍一

印刷者

東京市麹町區九段一丁目四番地
海野勇助

印刷所

東京市麹町區九段一丁目四番地
文雅堂印刷所

製本・河手製本所

發行所

東京市日本橋區吳服橋二ノ五

春

秋

社

振替東京三九七一六・電話日本橋二六二四

發賣所

株式會社

松

柏

館

日本コンツェルン全書

(全十九卷)

全卷完成記念・分冊分賣

時の問題を最も鮮かに擲んだ時代の書として、我が日本コンツェルン全書は、嵐のやうな歡迎裡に全十九冊の完成を見た。我が社は近く自由な分冊分賣の必要に迫られてゐるが、それには從來の一冊一圓六十五錢を一圓八十錢に値上げするの止むを得ざる事情の下にある。その理由は改めて説明せずとも既に御諒知の事と考へる。この値上りに先立つて、全卷完成記念奉仕の意味に於て、全國各書店に本全書を相當潤澤に配本し、全卷なり分冊なり先立つて、全卷完成記念奉仕の意味に於て、全國各書店に本全書を相當潤澤に配本し、を待つ。

全十九卷書名並びに執筆者名

第一卷	日本財閥論	高橋 二郎 吉共 著
第二卷	三井コンツェルン讀本	和田 日出吉 著
第三卷	三菱コンツェルン讀本	岩井 良太郎 著
第四卷	住友コンツェルン讀本	西野 喜與 著
第五卷	安田コンツェルン讀本	小汀 利得 著
第六卷	日産コンツェルン讀本	和田 日出吉 著
第七卷	満鐵コンツェルン讀本	小島 精一 著
第八卷	證券財閥 <small>(野村・小池・山一)</small> 讀本	栗林 正修 著
第九卷	淺野・澁澤 大川・古河 コンツェルン讀本	西野 入愛一 著
第十卷	大倉・根津 コンツェルン讀本	勝田 貞次 著
第十一卷	新興コンツェルン讀本 <small>(日室・森・日曹・理研)</small>	三宅 晴輝 著
第十二卷	財界人物讀本	鈴木 茂三郎 著
第十三卷	電力コンツェルン讀本	三宅 晴輝 著
第十四卷	生保コンツェルン讀本	高垣 五一 著
第十五卷	製糖コンツェルン讀本	小野 文英 著

外 98
元

第十六卷 紡績コンツェルン讀本 和田日出吉著

第十七卷 川西・大原 伊藤・片倉 コンツェルン讀本 三宅晴輝共著

第十八卷 産業組合讀本 山賀川勉豊彦共著

第十九卷 川崎・鴻池コンツェルン讀本 勝田貞次著

附 各財閥の化學工業部門研究

〔申込略規〕

一、配本 全卷完成・分册分賣

全國各書店に全卷配本陳列して有りますが、萬一品切の節は直接本社へ願ひます。尙部數に限りがありますので、品切の節は何卒御容赦下さい。

定價も十月廿一日以降壹圓八十錢に改正致します。

各册菊判上製カバー付平均四百頁・寫眞凸版多數挿入、

各册一圓六十五錢

市内六錢、地方十四錢、殖民地十八錢。

東京・春日橋 振替電話 東京二橋 四二六二 八二六二 六一四

讀者奉仕・分册分賣

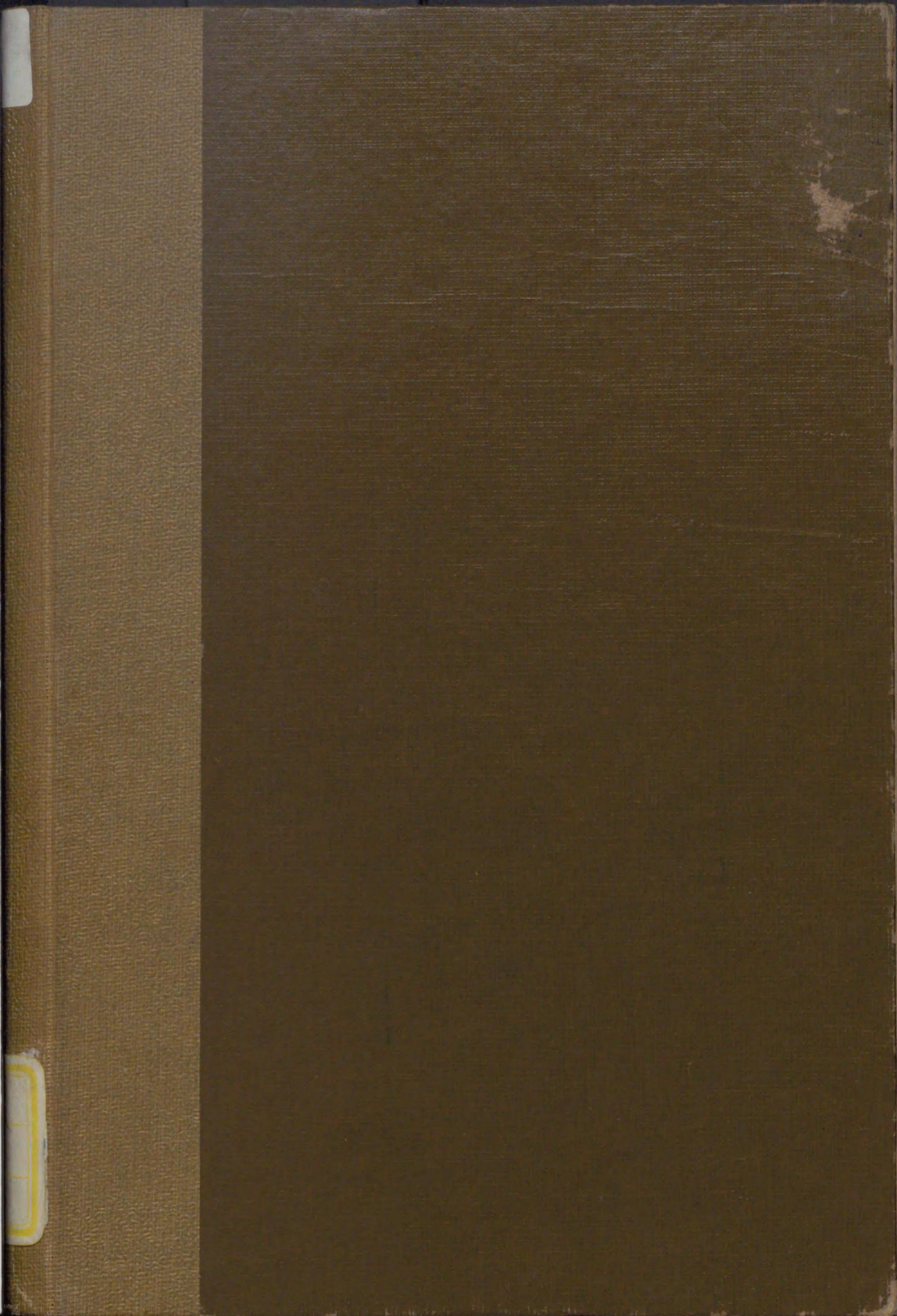
奉仕期間十月二十日迄

★來る十月廿一日以降一册定價一圓八十錢★

1757
140

~~565.5~~
~~KE24~~

~~140~~

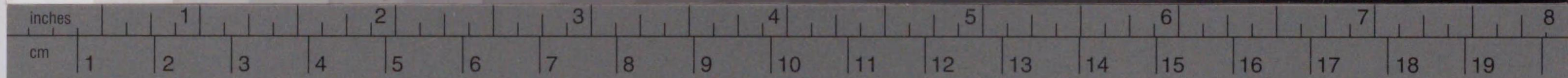


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

